

特集

特別展

マダガスカル 霧の森林のくらし

会期
2013年
3月14日(木)―6月11日(火)
場所
国立民族学博物館
特別展示館

前略 読者の皆さま

冬芽の開くのが待ちどおしいころとなりました。みんなく春の特別展も、いよいよ開幕します。今回のテーマはふたつ。バオバブやキツネザルで知られるマダガスカルと、今年で条約採択一〇周年を迎えるユネスコ無形文化遺産についてです。

日本ではまだ遠いと思われるマダガスカルに、どこまで肉迫できるか？ 有形とはかぎらない技術や知識を、博物館で展示できるのか？ どちらもむずかしい課題です。しかし、わたしたちが長い議論のすえに出した答えが、もうすぐご覧いただけます。ぜひ一度、足を運んでお確かめください。

春とともにみんなくでお待ち申しあげます。

特別展 準備関係者一同 草々



みたことのある異郷

―特別展

「マダガスカル 霧の森林のくらし」のねらい

飯田卓 民博民族社会研究部

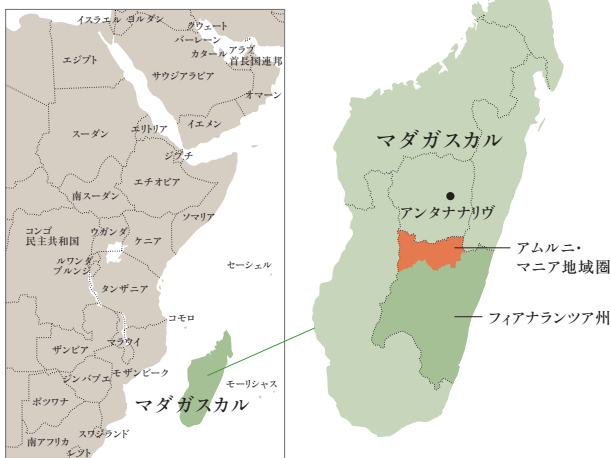
小さな山里のくらしから

マダガスカルは、アフリカ大陸の東方にある島国である。小さく見えるが、面積は日本の国土の一・六倍。文化的には、アフリカや東南アジアなどさまざまな地域から影響を受けてきた、ユニークな場所である。今回の特別展は、そのマダガスカルの中央高地の片隅にある「霧の森」が舞台である。挿絵をご覧いただきたい。山の谷あいあの小さな村。今回の展示準備でデザイン総指揮をとる上まりこさんには、はるばる現地まで出向いて描いてもらった。彼女によると、この村は、幼いころにすごしたおじいさんおばあさんの村に似ているそうである。村の周りに広がる棚田と林、玩具を手づくりする子どもたち、村の物知り、収穫の喜び、そして大家族の支えあい。

自然の障壁に阻まれたくらしが理想とはいえない。しかし、一、二世代前の日本にありふれていたこうしたくらしは、よきにつけ悪しきにつけ、理想のくらしを考える拠りどころとなっていた。いま、気づいてみると、それを雰囲気たりとも知る日本人が少なくなっているのではないか。大阪万博の前年に生まれたわたし自身、社会性とともにある田舎ぐらしを嗅ぎとった最後の世代であると思う。

田舎ぐらしのよき悪さをひっくり返して体感する経験を失うことは、若い世代にとって大きな損失だろう。マダガスカルという異郷の、とても小さなくらしをとおして、それをあらためて想像することができないか。展示会のプランを煮つめるにつれて、そう思った思いは強くなっていった。

展示のなかでは、マダガスカルと過去の日本を直接に比較したりはしない。そんなことをすれば、





ザフィマニリの家でしばしば客に勧められる腰かけ。ザフィマニリの木彫りが有名になるにつれ、ユニークな幾何学模様がほどこされるようになった



村から村へと木材を運ぶのも、ザフィマニリのくらしで大切な仕事のひとつ(撮影・内堀基光)

対象を小さく絞ることには、一長一短がある。短所は、小さな地域のことながら一般的な問題や関心に結びつきにくいことだろう。しかしこれは、考えてみれば、文化人類学者がつねにとり組んでいる問題だ。文化人類学者は、ウルトラミクロな村の生活から、ウルトラマクロな人類史まで語ってしまう。今回の展示会は、とても文化人類学的といえる。

マダガスカルといえば熱帯を連想するかもしれないが、ザフィマニリが住むのは標高千メートルを越えた高地で、冷涼である。ここで、インド洋の蒸気が冷えて霧となり、たくさん樹木をめぐんでいる。この木を利用するかたちで発達した木彫りの技術と知識は、二〇〇三年にユネスコの注目を受け、三年後に無形文化遺産のひとつとなった。

強調したいのは、指定されたのが技術と知識であり、個々の木彫り作品でないということだ。また、日本の人間国宝のような個人でもなく、くらしのなかでうけ継がれた技術が指定対象である。これを展示するには、標本資料(作品)を並べても、個人の履歴を紹介しても、不十分である。村のくらしをそっくり展示することが、無形文化遺産そのものの紹介につながる。そこで展示会では、標本資料や動画資料、写真やデッサンを駆使して、村のようすを体感してもらうことをめざしている。

村のくらしをそっくり展示、これまた難題である。展示のできればえ、ぜひとも観覧者のご判断をおきたい。

マダガスカルの山里が現代の動きから残り残されているように誤解されるだろう。じつさいのところ、この山里は、細々とした車道をとおして世界につながっていて、国際レベルの文化行政や観光ビジネスの影響をもろに受けている。このため展示会では、山里のくらしを、あくまで同時代のものととらえている。

マダガスカルの山里は不便である。しかし、それゆえにこそ、くらしを豊かにしていく希望に満ちている。いまあるくらしのなを手もとに残し、なにを捨てるか、それは住民の自由意志である。同時代にあつてこうした立場にある人たちを、日本のわれわれが知るのは無駄ではない。豊かさの追求を行政や企業にまかせてしまうのではなく、自分たちの手にとり戻してみようではないか。

ユネスコ無形文化遺産一〇周年

展示会でとりあげるのは、マダガスカル国アムルニ・マニア地域圏のアントウエチャ村とアンブヒミトウンプ村である。いずれも行政村で、多数の集落が含まれる。ここに、ザフィマニリとよばれる人たちが住んでいて、焼畑と水田稲作を営みながらくらししている。マダガスカルの人口約二〇〇〇万に対して、ザフィマニリの人口はわずか数万。民族としてはきわめて小さなグループである。また、彼らが多く居住するふたつの行政村も、一四〇〇近くある行政村に比べればわずかにすぎない。こうした小さな人口や地域をとりあげることは、全世界を対象とすることもあるみんぱくの展示会にあつて、特殊なことだ。

さまざまなかたちでくらしに役立つ木材を伐りだす(撮影・川瀬慈)



手づくりのごさをたくさん使って覆いとした寝台。生後1ヵ月までの乳児を育てるため、母親と乳児が起居する。物理的な保護と、霊的な加護が目的である

何処にもない世界

深澤 秀夫 ふかざわ ひでお
東京外国語大学教授

マダガスカルに行かれる機会があったら、ぜひしばらく行き交う人たちの顔をウォッチングして欲しい。場所と地方は何処でもかまわない。感心するほどいろいろな顔立ちと出会うはずである。アジア？ アフリカ？ アラブ？ インド？ どの混血？ あ、彼は、彼女は、日本人をつくり！ 経験豊富な旅人は、「そんな光景は世界のどこそこでも見られるさ」と言うかもしれない。しかし、その多様な顔つきの人びとが、お互いに理解可能なひとつのこぼしをしゃべっているとしたらどうだろうか？ そして、そのこぼしが、インドネシアやマレーシアやフィリピンの人びとのことばと同じ仲間だとしたら？ マダガスカルの人びと一人一人の顔には、マダガスカルを舞台に繰り広げられた二十有余年のインド洋の歴史が刻まれているといっても過言ではない。

その一方、今マダガスカルにおいて目に見えるものは、ときとして人を欺く。こんなことが想像できるだろうか？ 草だけが生い茂る丘や山が、かつては緑の森に覆われていたことを。アジアを思い起こさせる各地に広がる水田と稲作の風景も、その多くは一九世紀以降に広まったものであることを。ザフィマニリはじめマダガスカルの人びとの食生活を支えているキャッサバや

マダガスカル北西部の調査村でのスナップ写真



トウモロコシやサツマイモは、一七世紀以降新大陸からもたらされたものであることを。東南アジア各地に見られる、一度埋葬した遺体を掘り出し遺骨だけを墓に納める習慣が、マダガスカルではその多くが二〇世紀以降の「伝統」であることを。今はレンガや土壁造りの中央部地方の家々が、一九世紀以前にはみんなザフィマニリの家屋と同じ木造であったことを。

マダガスカルの人びとの顔のひとつひとつ、生活の一コマコマは、世界の何処かしらで見つかる。しかし、その全体はマダガスカルにしかない。そして、わからない事だらけの過去。だから、マダガスカルは面白い！



村を出る葬列

霧の森とは

吉田 彰 よしだ あきら
東京情報大学教授
財団法人進化生物学研究所

マダガスカルは自然環境は東西で大きく異なり、それをわかつ障壁が島の中央を南北に走る中央高地である。年間をとおしてインド洋から吹き寄せる貿易風は、この障壁の東側に多量の雨をもたらす。いわゆる熱帯多雨林が発達する。しかしながら、標高差が千数百メートルに達するこの地域の自然環境が、一様であるはずはない。貿易風は、水分の大半を低地に落とした後、立ちほだかる急峻な斜面を吹き上がる。そして中

央高地の東の肩にいたると、気圧と気温の低下に夜間の放射冷却が加わって残りの水分が凝結し、とくに夜半から明け方にかけて日常的に霧が発生する。降水量の多い低地の森を親しみやすく「雨の森」とよぶならば、この細い帯状の地帯にはぐくまれる森は「霧の森」である。

豊かな降水量と高温に恵まれて育つ雨の森は、高さが三〇メートルを超すことが珍しくない。それにくらべて霧の森では木々の生長が遅く、ふつうは高さ三〇メートルを下回る。霧の森は背丈が低い分、高木層、中高木層、低木層などからなる層状構造の間隙が圧縮されたように狭い。また、太陽光線が届きやすいせいか、下層の密度も高い。霧の森にわけ入ると、目を見張るばかりの植物多様性に驚かされるが、それは高い植生密



かつて多用されたパリサンドラは枯渇したが、伝統は代替材で継がれる



ザフィマニリ居住圏の延長にあるラヌマファナ国立公園の豊かな森

度にも一因があるだろう。さらに霧の森の分布域は緯度にして一〇度前後、標高にして八〇メートル前後の幅があり、それらの条件による地域差が少なくない。たとえば距離が五〇キロメートル、標高が二〇メートル違えば、森を構成する植物種の差に気づく。したがって、総体的に見た霧の森の植物多様性は、きわめて高いのである。ところで、ザフィマニリの民の生活圏は標高が高いうえに標高差にも富み、厳しい環境でゆつくり育つ多様な樹種から紫檀の一種パリサンドラ（マメ科）をはじめナトウ（アカテツ科）などの材質の緻密な良質材がえられる環境にある。彼らの伝統的な木の文化は、霧の森がもたらしてくれた恵みを抜きにしては考えることができない。

マレーシアの森の人と マダガスカルの人

うちぼり もとみつ
内堀 基光
放送大学教授



水田を見守る子どもたち



インゲンマメのさやを乾かし
豆を取り出す



インゲンマメ用の焼畑に火を入れる

ボルネオ島（マレーシア・サラワク州）に住む焼畑民イバンとマダガスカル島の焼畑民ザフィマニリの比較をしようと思いついても一五年以上になる。じつのところ比較というよりも対照ということばのほうがずっと実感がある。比べる以上、共通の基盤があることは大前提だが、それにしてもいろいろ違いが目立ちすぎるのだ。焼畑民はたいてい二次林を利用して作物を栽培する。原生の森を切り拓くことはごく限られた状況下でしかない。こうしたところはイバンもザフィマニリも同じなのだが、何よりもまず作っているものが違う。イバンの焼畑は陸稲で、彼らは自他ともに認める米の民である。ザフィマニリの焼畑はトウモロコシやらインゲンマメ。ザフィマニリも米を作っているのだが、その導入は比較的新しく、すべて水稲である。昔も今も、これらに加えて湿地でタロイモを栽培する。一人あたりの米飯摂取量が世界一という説もあるマダガスカルにあって、ザフィマニリは今もつて（というべきか）米の民ではない。

それと関係するのかどうか、ザフィマニリの食生活で不思議なのは、どうも山菜を食べないらしいということである。森は集落から遠の

きつつあるけれども、自家用の木材の伐採や他村への訪問のときなど、うっそうとした森のなかを歩くことは多い。これはイバンでも同じなのだが、イバンにとって森は食いの宝庫であって、常に食べる動植物の存在に注意しながら歩く。同行するわたしにもしよつちゅうそれらの採り方や食い方を話してくれた。そのせいで、ザフィマニリと森を歩いているときにも、山径の傍の木や草が可食かどうか訊くようにしていたのだが、「食べられるよ」という答えを聞いたことがない。「食べない」の連発なのだ。竹は屋根を葺くのに重用されているのだから、タケノコだつてたくさん生えているはずなのだが、ザフィマニリの村でタケノコを供されたことはない。イバンはいろんな種類のタケノコを食べるのだが。

アントエチャ村での上映会

川瀬 慈
民博文化資源研究センター

世界各地において、多くの無形文化が消滅の危機に瀕しているなか、映像を活用した無形文化の保全と継承の有効性が指摘されている。わたしは二〇一二年の八月から九月にかけて、マダガスカル中央高地において、ザフィマニリの人びとのものづくりと生業の映像記録をおこなった。ザフィマニリの社会には、近年欧州をはじめとした世界各国からツーリストが押し寄せ、人びとの生活や物質文化の変化が加速している。

ザフィマニリの家づくりを撮影するために、ザフィマニリが多く住むアントエチャ村を訪れた。アントエチャ村の村長宅で、村長の妻（故人）が、伝統的な織機を用いて機織りをおこなう姿を、みんぱくが一九九七年に記録した映像がある。わずか一五年のあいだに、織機も機織りもアントエチャから完全に消え去ったという。撮影の合間に、村長宅で、この映像の上映会をおこなった。パソコンのまわりには、村

長の家族や、近所の住人たちが三〇人ほどが集った（その半数以上が幼い子どもである）。村長は、映像を見ながら、身振り手振りを交えて、機織りの工程や、川岸にあった糸の染色場、亡き妻についてのエピソードなどを語る。おそらくはそれ以外にも土地や、慣習に関する多くの重要な情報のやりとりが世代を超えてあったのではないだろうか。子どもたちは真剣なまなざしで映像をみつめ、村長の言葉に耳を傾け、あれやこれやと、質問を投げかけていた。

小さなパソコンのモニターを使った、わずか数十分の映像上映に対する、まるで劇のなかのような、人びとのさまざまな反応、豊かなやりとりは、強く印象に残った。このような取材映像の現地社会への還元によって生み出される、人びとの声や相互行為のなかにも、無形文化に付随する重要な情報や知識が含まれていないだろうか。それらの声に対して、我々は注意深く耳を傾けていく必要があるのかもしれない。

アントエチャ村で15年前に撮影された映像を観る人びと

